

説経・古浄瑠璃を題材とした絵巻・絵入り写本制作の一樣相

—個人蔵『しゅつせ物語』（さんせう太夫）を例に—

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 糸 汐里

要 旨

説経、古浄瑠璃は、近松門左衛門以前の、日本の中世末期、近世初期に盛んであった語り物文芸である。従来の文学史、芸能史において、説経・古浄瑠璃のテキスト研究は、近世初期の古活字版や万治寛文以降の半紙本など、版本を中心に進められてきた。しかし、説経・古浄瑠璃は、絵巻・絵入り写本、挿絵の多い草子本などのかたちでも数多く伝わっている。これらは本文研究において正本と同等の有益な資料群であると考えられ、いまは現存しない正本の復元など、多くの可能性を秘めている。にもかかわらず、説経、古浄瑠璃の絵巻、絵入り写本をめぐる総括的研究は、同時代の芸能―能、狂言、幸若舞曲―に比し、いまだ十分とはいえない。本稿では、説経、古浄瑠璃の絵巻、絵入り写本の重要性を示す一事例として個人蔵『しゅつせ物語』を取り上げ、その特徴と意義を報告する。

『しゅつせ物語』は森鷗外の著作で知られる『さんせう太夫』の一伝本で、未紹介のテキストである。装丁に着目すると、初期説経正本と同じ三冊本形態である点、説経のテキストとしては珍しい列帖装の豪華絵入り写本である点が注意される。本文もまた、初期のテキストである寛永末年頃刊行の天下一説経与七郎正本、明暦二（一六五六）年刊行の佐渡七太夫正本と同時代の、古態をとどめたものである。

しかし個人蔵本は、これら同時代のテキストにはない特徴を有している。まず挿絵をみると、豪華な絵入り写本という形態にふさわしく祝言性を強調し、残忍な描写を回避する傾向がある。これは、説経や古浄瑠璃を題材とした絵巻・絵入り写本の制作意図を把握する貴重な例である。次に諸本を比較してみると、個人蔵本には、従来知られてきた与七郎本系統とは異なる、独自本文が確認できる。

また物語にとって重要な場面である天王寺が、個人蔵本では北野天満宮に置き換えられている。この点に着目し、中世末、近世初期に北野天満宮の境内が芸能者の参集する場であったという先行論をふまえつつ、『しゅつせ物語』に当時の北野社の繁栄が投影されていることを指摘した。

キーワード：説経 古浄瑠璃 絵巻 絵入り写本 奈良絵本 さんせう太夫

- はじめに
- 一. 個人蔵『しゅつせ物語』について
 - 二. 挿絵について―横山重旧蔵「出世物語」との関係
 - 三. 諸本における位置
 - 四. 北野天満宮との関わり
- おわりに

はじめに

説経・古浄瑠璃のテキスト研究は、近世初期の古活字版や万治寛文以降の半紙本、つまり版本を中心に進められてきた。『説経正本集』一―三(角川書店、一九六八年)、『古浄瑠璃正本集』一―十(角川書店、一九六四―八二年)の構成からわかるとおり、正編には異論無く「正本」といえるテキストを配置し、厳密には正本といえないテキスト―絵巻、絵入り写本、挿絵の多い草子本―を正本に準ずるもの、または参考資料などと称して附録篇やその解題篇に収めている。

絵巻や絵入り写本の中には、本文が説経や古浄瑠璃に近い、あるいは、本文そのものでありながら、位置づけがあいまいなまま「お伽草子」と扱われるものも多い。『浄瑠璃御前物語』『村松』『堀江』『田村』『阿弥陀の本地』などは、中世から近世にかけての本文形成のありようが解明されているものの、一作品論にとどまっている⁽¹⁾。他方、能、狂言、幸若舞曲など、同時代の芸能史研究では、絵巻や絵入り写本の資料価値を積極的に評価し、成果をあげている⁽²⁾。この点を鑑みれば、説経、古浄瑠璃における絵巻、絵入り写本に関する総括的な研究は、いまだ不十分であるといえよう。

筆者は右の現状を受け、現存数、制作事例を確認すべく説経・古浄瑠

璃の作品ごとに版本、絵巻、絵入り写本のテキストを整理分類したりリストを作成中である。その作業の過程で、絵巻や絵入り写本が本文研究にとって正本と同等の有益な資料群であり、いまは現存しない正本の復元など、多くの可能性を秘めていることがわかってきた。全体像については別稿で報告することとし、ここでは絵巻・絵入り写本研究の重要性を示す一つの事例として『しゅつせ物語』を取り上げてみたい。

一・個人蔵『しゅつせ物語』について

個人蔵『しゅつせ物語』は、説経の代表的作品『さんせう大夫』の一伝本である。現在個人の所蔵で原本調査は困難だが、幸いにもマイクロフィルムが慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に収められている。今回はその斯道文庫蔵のマイクロフィルムに拠って、詳細を報告していきたい⁽³⁾。以下に、マイクロ巻頭に記載された書誌を転記し、『補足』に画面から把握できる書誌情報を併記しておく。

しゅつせ物語 (山椒大夫)

江戸前期写 奈良絵本3帖

紺地金泥草花模様表紙(二三・五×一七センチ)

見返し金銀切箔散し白紙、料紙鳥の子

綴葉装両面書、字高サ約一八センチ

(上) 十七丁 (中) 十八丁 (下) 十六丁

昭和四十二年十一月二十日撮影 請求番号二・四・一二三

《補足》外題、左肩貼題簽に「しゅつせ物語上(中下)」と墨書。題簽料紙装飾に芝のような植物を描く。

本文、十行。行数、十九〜二十字前後。挿絵、上巻五図、中巻六図、下巻三図。

留意すべき点は主に二つある。一つめは個人蔵本が三冊形態である点である。上中下巻、三冊の形態は初期説経正本の特徴というのが定説だが⁽⁴⁾、この形態を備えるものとしては、端本も含めて次の五点が挙げられる⁽⁵⁾。

- ・天理大学附属天理図書館「さんせう太夫」上中下三冊 中本 天
下一説経与七郎正本 寛永末年頃刊
 - ・天理大学附属天理図書館「せつきやうかるかや」上中下三冊 中
本 寛永八年刊
 - ・天理大学附属天理図書館「せつきやうしんとく丸」上中下三冊 中
本 佐渡七太夫正本 正保五年刊
 - ・天理大学附属天理図書館「せつきやうさんせう太夫」上中下三冊 中
本 佐渡七太夫正本 明暦二年刊
 - ・信田純一氏「せつきやうをくり」中巻の一部零葉二枚半 半紙本
- また厳密には正本といえないが、絵入り写本や、挿絵をふんだんに盛り込んだ草子のかたちでも、三冊本は次のように伝わっている。
- ・神宮文庫「(をくり)」下巻のみ(上中巻欠) 半紙本 古活字版
 - ・天理大学附属天理図書館「おくり」上中下三冊 横型絵入り写本
 - ・赤木文庫旧蔵「おぐり物語」中下巻(上巻欠) 寛文期刊 大本
 - ※国立国会図書館に同版あり(下巻のみ)
 - ・大阪大学附属図書館赤木文庫「さんせう太夫物語」中下巻 寛文
期刊 大本
 - ※上巻、阪口弘之氏蔵

これら三冊本は、『説経正本集』、東洋文庫『説経集』、新潮日本古典

集成、新日本古典文学大系の底本に使用されたものばかりであるが、その理由として、右の伝本がいずれも初期の説経独特の文体上の特徴を備えていることが挙げられる。荒木繁氏は、このような特徴を備える本文を明暦以前の語りとし、特にそれらを「古説経」と称して区別した⁽⁶⁾。荒木氏のいう初期説経の文体上の特徴とは、以下のようなものである。

- ・卑俗な口語的言いまわし
- ・敬語の過剰なまでの使用
- ・「旅装束をなされてに」というように「に」という間投詞を入れる独特の語法
- ・道行の「先をいづくとお問ひある」という挿入句
- ・本地語りの序

以上の特徴は明暦を過ぎると衰退し、体裁も本文を六段に分けた説経浄瑠璃へととてかわるという。これらの特徴全てが『しゆつせ物語』に当てはまるわけではないが、三冊本であること自体、初期説経本の形態として重要な意味を持つと言える。

二つめは、装丁が綴葉装(列帖装)である点である。絵入り写本で列帖装といえば、豪華な嫁入り本である事例が多いが、個人蔵『しゆつせ物語』もまた、表紙や料紙に丁寧な料紙装飾が施された豪華本である。説経の伝本の中で、このような豪華な装丁を備えるものは少ない。よく知られた御物絵巻の『をくり』十五軸や、サントリ美術館の絵入り写本『かるかや』二冊(元一冊)、先の横型絵入り写本『おくり』三冊などが、そうである。古浄瑠璃に目を配れば、いわゆる岩佐又兵衛古浄瑠璃絵巻群をはじめ、学習院大学日本語日本文学研究室『よしうじ』五軸や、慶應義塾大学附属図書館『ともなが』二軸など、大部な形で残る事例が多い。確認の限り、説経や古浄瑠璃を題材とした絵巻・絵入り写

本は、本文が古態を留めている場合が多く、それらは時に最古の正本より長い詞章を持つ。増補の可能性があるため、成立の前後関係を解明することは容易ではないが、場合によっては正本が上梓されるよりも先に、絵巻や絵入り写本のかたちで読み物として流布した例もあったのではないだろうか。ここに紹介する個人蔵『しゅつせ物語』もまた、現存する正本にはない詞章を含んでいる。これについては、後ほど詳しく検討したい。

二．挿絵について―横山重旧蔵「出世物語」との関係

次に、諸本間における個人蔵本の位置づけについて考えてみたい。初期の「さんせう太夫」伝本としては、今回取り上げる『しゅつせ物語』も含めて、次の五本が知られている（以下、□ 枠内の略称を用いる）。

版本

①天理大学附属天理図書館「さんせう太夫」上中下三冊（巻頭、巻末など一部欠）、中本、寛永末年頃刊、天下一説経与七郎正本

与七郎本 《説経正本集一、新日本古典文学大系》

②天理大学附属天理図書館「さんせう太夫」上中下三冊（合綴）、中本、明暦二年（一六五六）刊、さうしや九兵衛（京都）、佐渡七太夫正本 明暦本 《説経正本集一、新日本古典文学大系》

③阪口弘之氏・大阪大学附属図書館赤木文庫「さんせう太夫物語」上中下三冊（上巻のみ阪口氏蔵）、大本、寛文後期刊、鶴屋喜右衛門、太夫未詳 草子本 《説経正本集一、新日本古典文学大系》

写本

④横山重旧蔵「出世物語」縦型奈良絵本 現在所在不明 横山本

⑤個人「しゅつせ物語」上中下三帖、縦型半紙本 上中下三冊

個人蔵本

従来の諸本研究においては、①の与七郎本が現存最古の正本とされているが、巻頭巻末その他に欠丁や破損があり完全ではないので、それらの欠損箇所を、与七郎本ときわめて近い本文関係にある③の草子本で補い、本文全文を見渡すことが出来る。②の明暦本は①の与七郎本を省略した本文であるが、その省略法は与七郎本文をそのまま部分的に切り取るような方法であるという⁷⁾。以上が初期の重要な伝本の概要であるが、これらに加えておきたいのが、④の横山本の存在である。この本は、かつて横山氏が「説経正本に準ずる諸本」（『中世文学 研究と資料』国文学論叢第二輯、一九五八年）で言及された「さんせう太夫」の絵入り写本のことである。長いが重要な記述を含むため、以下に該当箇所を引用しよう。

その二つは、当時、わたしの持つてゐた、豎形の奈良絵本の「出世物語」である。この本は、安田文庫蔵、明暦二年六月刊、佐渡七太夫正本「せつきやうさんせう太夫」（＝明暦本↓引用者注、以下同）の正確なウツシであった。

明暦刊の七太夫正本は、それより先行の、寛永ごろ刊行の、説経与七郎の正本「さんせう太夫」（＝与七郎本）を、極度に省略した、いはば筋書のやうな正本である。（中略）明暦板の挿絵は、木の葉で、姉と弟の水盃のところであるが、本文には、その事がない。しかも、奈良絵本の「出世物語」（＝横山本）は、本文は、明暦板に従ひ、挿絵はやはり、木の葉を以て、水盃をするところである。そこで、この奈良絵本は、明暦板に依ったこと明白である。（中略）

厨子王は、土車に乗って、大坂の天王寺に行く。（中略）只、この場合も、明暦の七太夫の正本は、与七郎の正本に従ってをり、その挿絵も、上に「天王寺」といふ額のある鳥居の下に、アジャリと厨子王が立つてゐる。さうして奈良絵本の「出世物語」も、細部に

至るまで、明暦の正本どほりである。ちなみに、寛文版、延宝版、正徳版等の正本や、鵜外漁史の「山椒太夫」なども、土車で大坂の天王寺へ行くといふ筋には、してゐない。朱雀の権現堂から、すぐに東山の清水寺へ行つて泊ることになつてゐる。

それとはにか、奈良絵本「出世物語」は、明暦の七太夫の正本をウツシタものであり、東大の大形奈良絵本「天狗のだいら」は、明暦の山田板のウツシであることを知つたので、当時、手許にあつた奈良絵本の「おくり」も、あるひは、古い正本をそのままウツシタものかも知れぬと考へて、結局、正本に附載した。

横山氏の所持した「出世物語」は、個人蔵本と同じ縦型三冊の絵入り写本であつたというから二点は同一と考えそうになるが、そうではない。その根拠は、横山本の二つの特徴にある。一つは横山本が明暦本の忠実な写しであつたこと。いま一つは明暦本と横山本の挿絵には柏の葉で盃を交わす場面の絵があるが、本文には、それがみえないことである。この二つの特徴は、個人蔵本にはあてはまらない。たしかに、個人蔵本の本文は冒頭から末尾まで、基本的に明暦本の本文にそつているが、中巻に入ると、与七郎本に近くなり、下巻の天王寺の場面にいたつては、与七郎本、明暦本とは全く異なる本文を有している。また挿絵も、場面選択、描写などの点において与七郎本、明暦本との関連は低く、横山氏の強調する明暦本との一致は、個人蔵本にはあてはまらないのである。

右の問題を考えるために、ここで挿絵について整理してみよう。マイクログフィルムは閲覧のみ可能であり、複写や掲載は許可されていないため、絵の説明のみの限られた考察になることをご理解いただきたい。個人蔵本を基に与七郎本、明暦本、横山本の挿絵を比較したものが、(図1)の表である。

与七郎本と明暦本の挿絵の關係に注目すると、明暦本の挿絵は与七郎

本の欠丁部(―)を除いて、必ず同じ構図の絵が見いだせる。すなわち、与七郎本と明暦本の兄弟關係は、本文に限らず、挿絵にも適応できる。また、与七郎本と明暦本の挿絵をひとくくりで考えるとき、いずれかに対応する個人蔵本の挿絵は、全十四箇中、九箇である(1)(3)(5)(6)(9)(10)(12)(13)(14)。しかし、同じ場面を描きながら、確実に影響關係にあるものは一つもない。(3)(5)(6)(14)は同じ構図であるので与七郎本、明暦本、どちらかの版本を参照した可能性も捨てきれないが、それ以外の挿絵の独自性を考慮すると、その可能性は極めて低い。なお、最も挿絵の数が多し草子本との關係であるが、与七郎本、明暦本と比較すると、全二十一箇中、七箇に、与七郎本ないしは明暦本との明らかな影響關係が認められる。以上のことから、右で確認してきた与七郎本、明暦本、草子本の系統に対し、個人蔵本は孤立しており、きわめて独自の挿絵を有しているといえよう。

個人蔵本の挿絵は、いわゆる奈良絵本とよばれる絵入り写本の描き方であり、版本よりも屋敷内の景観の方が多く描かれる特徴がある。また独自の挿絵のうち、注目すべきは(9)(14)であろう。★で注記したように、説経諸本の代表的な拷問や斬首など場面が、個人蔵本では省略されている。(14)の場合は省略ではなく、単純に描かなかつた可能性も考えられる。しかし、(9)の挿絵の場合、古木を見上げる二人の男が描かれ、古木の下には長方形の手水鉢のようなもの、その上に柄杓が置かれている。しかし、肝心の安寿が不在なのである。拷問の道具である古木や柄杓、男の視線などを用いて、拷問の様子を象徴的に表そうとしており、明らかに残忍な場面を回避する意図が働いている。

また「柏の葉で盃を交わす」場面の絵は、横山本にあつて個人蔵本にないため、横山本と個人蔵本は別本と判断できる。このことはすなわち、「出世物語」と題された『さんせう太夫』の伝本が複数流布していた状況を意味している。

〔図1〕

個人蔵本		与七郎本	明暦本	横山本
(1)	家の中で泣き沈む一家四人の人々		○	
(2)	山岡大夫の宿に到着した一家四人		○橋で山岡太夫に会う	
(3)	舟で売られてゆく親子(うわたき不在)	○	○	
(4)	酷使される安寿とづし王			
(5)	安寿とづし王の逃亡の話を立ち聞きする三郎「上巻」	○		
(6)	焼金をあてられる安寿	○	○	
(7)	杓と鎌と柄杓を持ち山道を歩く安寿とづし王			
(8)	地藏菩薩に祈願する安寿とづし王			○
(9)	古木釣り上げの拷問にかけられる安寿 (★拷問を受ける安寿の姿、なし)	○		
(10)	護摩の壇に向かい経尽くしの誓文を唱える聖	○	○	
(11)	鉦鼓で神おろしの誓文を唱える聖「中巻」	○皮籠を下ろす三郎ら		
(12)	づし王と聖の別れ	○	○	
(13)	梅津の院、土車のづし王を見る	○天王寺で大師に会う	○	
(14)	づし王、さんせう太夫一家に対面「下巻」 (★鋸で首を挽かれるさんせう太夫の姿、なし)		○	

ところで、外題の「出世」とは、どのような意味をもつのであろうか。この点について、古辞書類から参考に値する記事を確認することはできない。『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二—一九九九年）をみると「出世」の項には七つが記載されている。そのうち本地語りの序や、づし王の出世といった物語の内容をふまえれば、次の三つが関わってくるだろう。

- ① 世に現れ出ること。生じて存在を現すこと。
- ③ 仏語。仏菩薩が衆生を導くために、この世に出現すること。
- ⑥ 地位や富を得て、世に名を知られるようになること。また、地位が上がること。

③の場合は、天理大学附属天理図書館蔵『釈尊出世本懐伝記』（天正九（一五八一）年）など、お伽草子『釈迦の本地』の外題に用いられる例が確認できる。また①や③の意味で「出世」を外題にもつ仏書は多い。「出世」を⑥の意で解釈し、外題とする例としては、やはり近松門左衛門の『出世景清』が重要であろう。岩崎雅彦氏によれば、この場合の「出世」とは、景清が説話や伝承世界で華々しく活躍するという意に加え、『凱旋八島』ともども「出世」や「凱旋」を冠することで、興行の成功を祈る縁起担ぎの意図も込められているという⁸⁾。個人蔵本の場合、本文や絵に祝言性を表す意図が見受けられるため、①③より、⑥の方がふさわしい。この点については後述するが、『しゅつせ（出世）物語』とす背景に、縁起を担ぐという意図があったことは確かである。また諸本中書名に「出世」を付す例としては、享保年間に上梓された糸井文庫「正氏出世始」（二冊、六段本）もある。内容は『さんせう太夫』と変わらないが、内題に「正氏出世始」とあり、物語を出世の話として捉える一面がうかがえる。だが、本書を紹介した鳥居フミ子氏も指摘するように

「正氏」はづし王の父の名であり、息子が梅津の院に見出されて出世した結末を考えるならば、父の名を外題にかかげるのは不自然である⁹⁾。ともあれ、このような例や、『しゅつせ（出世）物語』が複数存在したことを考えると、『さんせう太夫』を祝言の物語として捉える文化状況が少なからずあったようだ。そのような現象が果たして存在したのか、書籍目録からは確認できない。しかしながら、『さんせう太夫』が『しゅつせ物語』として享受されていた事実¹⁰⁾は、説経、古浄瑠璃が絵巻、絵入り写本化される工程を知る手がかりとなりえよう。

三. 諸本における位置

次に、個人蔵本の本文系統を詳しく見ていこう。初期の伝本である与七郎本、明暦本、草子本との関係が問題となるが、結論を先に言えば、個人蔵本は与七郎本と明暦本の中間的本文をもっている¹⁰⁾。したがって、ここでは与七郎本、明暦本の本文と比べながら、個人蔵本の特徴について確認してゆきたい。

まずは冒頭と末尾をそれぞれ確認しておこう¹¹⁾。

《冒頭》

【与七郎本】 欠丁

【明暦本】 ことは た、いまかたり申御物かたり、国を申さは、たんこの国、かなやきちざうの御本ぢを、あらくときたてひろめ申に、これも一たひは人げんにておはします、

人げんにての御ほんぢをたつね申に、國を申さは、あうしう、ひのものとしやうぐん、いわきのはんぐわん、まさうぢ殿にて、しよじのあはれをと、めたり、

此正氏殿と申は、ぢやうのこはひによつて、つくしあんらくしへなかされ給ひ、うき思ひを召されておはします、フシ あらいはし

やみたい所は、

【個人蔵本】さるあいた、

たんこ

の国、かなやきぢさうの御ほんちを、あら(ママ)はしひろめ申に、
これも一たひ八人けんにておハします、

にんけんにての御ほんちをたつね申に、国は、あふしう、ひのもと
のしやうくん、いわきのはんくはん、まさうち殿にて、しよじのあ
はれをと、めたり、

このまさうち殿と申は、大あくにんたるにより、つくしあんらくし
へなかされ給ひ、うきおもひをめされておはします、あらいたハし
やミたいところハ

冒頭の与七郎本は欠丁である。明暦本、個人蔵本は、ともに初期説経
の特徴である本地語りの序をもっており、異同箇所は傍線で示した程度
にとどまっている。

次に末尾については、明暦本との異同は傍線部のみで、内容的な違い
はない。

《末尾》

【与七郎本】欠丁

【明暦本】又山おかの太夫か女はうの、ほたいもよきにをとい有て、
それより、おうしうへ、にうぶいりとぞきこへける、ひうがのくにを、
ち、のいんきよ所とおさため有て、みねにみね、門にかとをたてな
らへて、ふつきはんぶくとおさかへあるも、なにゆへなれば、おや
かうく、かなやきぢさうの御ほんちを、かたりおさむる、すゑは
んじやうものかたり

【個人蔵本】また山をかのためふか女はうの、ほたいもよきにとふ
らひけり、さてそれよりも、あふしうさして、にうぶいりし給ふと

そきこえける、さてまた、ひうがのくにを、ち、のいんきよどころ
とさため給ひて、ミねにミねを、たてならへ、ふつきばんぶくとさ
かへ給ふ、これハなにゆへなれば、おやかうくのゆへなりと、か
のぢさうの御ほんちを、上下はんミンをしなへて、ミなかんせぬも
のとてなかりけり

このように、個人蔵本は上巻では全てにわたり、明暦本の詞章と重なり
展開する。下巻もまた、個人蔵本の一部に細かい異同がある他は、明
暦本の本文とほぼ同じである。だが中巻だけは、与七郎本に近い本文や
独自の本文が混在した、複雑な本文を有している。その中巻の異同の代
表的な箇所を、物語の展開に随いA～Hの順にあげた。本文比較の便を
考慮し、傍線部 で示した本文がない場合は、その位置に▼を置いて、
本文が無いことを、(本文なし)と表記した。

A

【与七郎本】つしわう殿はきこしめし、あねこのくちにてをあて、
なふなふいかにあねこ様、いまたうたいのよの中は、いはにみ、
かべの物いふ□とき也、しぜん此事を、大夫一もんきくならば、さ
て身は何と成べきぞ、をちたくは、あねごはかりおち給へ、さてそ
れかしはおちまいよの、あねこ此由きこしめし、みつから、おてう
はやすけれど、おんなにうぢはないそやれ、又御身は、いゑにつた
はりたる、けいづのまき物をおもちあれば、一どはよにいて給ふへ
し、いやあねにをちよ、おと、におちよ、をちいをちじともんどうを、
【明暦本】▼(本文なし)

【個人蔵本】つし王殿ハ聞しめし、なふいかにあねこさま、今のよ
と申ハ、かべにみ、いワのものいふよの中なり、このこと、たゆ
ふへきこえなは、おもハぬうきめにあふへきそや、おちい、あねこ

おち給へ、それかしハおちましきぞ、いやさないふぞ、つし王丸、ミつから、おちやうハやすけれとも、わらハ、女の事なれハ、おちのひてもそのミなし、おことハ、又なんしといひ、ことにいゑの、けいずのあれハ、つゐにハ世に出給ふへし、あねかい、つし(ママ)したかひかねて、おつるかくごをせよ、いやた、あねこおち給へ、いやおと、におちよ、とてたかひにあらそひ給ふにも、なミたのミそす、ミける

B

【与七郎本】 いくつかのうらはにありとても、太夫がふだいけにとよびつかふやうに、しるしをせよ、三郎いかにとの御ぢやう也、ツメしやけんなる三郎か、何かなしるしにせんといふまゝに、天しやうより、からこのすみをとりにだし、おふにわにずつはとうつし、しこのまるねをとりいたし、大うちわをもつてあふきたて、いたわしやひめ君の、たけとひとせのくろかみを、てにくるくるとひんまひて、ひぎのしたにぞかいかうだり、

【明暦本】 いくつかのうらはに有とても、太夫がふだい下人のしるしをせよ、三郎いかにとの御でう也、ツメしやけん成三郎が、▼(本文なし) いたはしやひめ君の、たけとひとせのくろかみを、てにくるくるとひんまいて、ひぎのしたにぞかいかうだり、

【個人蔵本】 それくいくつかのうらにありても、まかひのなきやうに、きやうたいかひたいに、やきしるしをせよ、うけたまはるとて、三郎かすミ火をおこし、あをきたて、しこのやのまるねをくべ、いたハしやひめきみの、たけとひとしきくろかみを、手にくるくるとひんめひて、ひぎのしたにひつらきける、

C

【与七郎本】 (三郎は) かねまつかいにやきたて、十もんじにぞあてにける、つしわう丸は御らんじて、をとなしやかにはおはしけれ共、あねこのやきがねにおどろいて、ちりりくるとをちらるゝ、

【明暦本】 (三郎は) かねまつかいにやきたて、十もんじにぞあてにける、つし王丸は御らんじて、おとろき、ちりりくるとおちらるゝ、

【個人蔵本】 (三郎は) よしやのねをあかくやきたて、いたハしやあねごぜんのひたいにをしあて、十もんじにやきたるハ、ミのけもよだつはかりなり、いたハしやつしわう殿此やきかねにもおそれたまはず、こはなさけなのしわざやな、うらめしの三郎とのやと、たおれふしてそなかけける

D

【与七郎本】 一二つ成共三つ成とも、みつからにおあてあつて、おと、はゆるひて給はれの、(中略) 大夫此由御らんじて、さてもなんちらは、くちゆへにあついめをしてよひ□と、一どにとつとぞおわらいある、あのやうなる、くちのさかない物ともは、

【明暦本】 一二つ成共三つ成共、水からにおあて有て、おと、をゆるして給はれの、▼(本文なし) ことは三郎此由聞より、じり、じつとそあてける、太夫□の由御らんじて、た、ほしころせと申さるゝ、

【個人蔵本】 ふたつなりとも三つなりとも、ミつからにあて給ひ、おと、をゆるして給はれと、(中略) たゆふか見て、やあなんちハ、是ゆへあついめをしたるよな、あのやうなる、くちのこハきやつはらハ、

E

【与七郎本】 あねこ此由きこしめし、さん候山へならば山へ、はま

へならばはまへ、ひとつにやつてたまわれとお申ある、大夫きこしめし、あふそれ人のうちには、わらいくさとして、一人なふてかなはぬ物よ、あねたに山へゆかうといはゞ、▼(本文なし) おうわらにはないて山へやれ、三郎いかにとの御ちやう也、うけたまはつて御さあると、あらいたはしやあねこ様の、たけとひとせのくろかみを、てにくるくとひんまいて、もとゆいきわよりふつときりて、

【明暦本】あねこ此由聞召、さん候山へならは山へ、□まへならははまへ、ひとつにやつて給れとお申有 ▼(本文なし) いたはしやあねの、たけと一せのくろかみを、てにくるくとひんまいて、ふつと切、

【個人蔵本】あねこきこしめして、なふ山へならは山へ、はまならははまへと、きやうたい一所につかふてたまはれ、あふそれ人の中には、わらひくさといふて、一人ハなふてかなはぬものぞ、あねたに山へゆかふといはゞ、一所にやれ、さりながら大夫か内には、女一人をつかひかね、おとこのわさをさするといはゞ、たに、きこえてもよるまし、たゝかみをさり、大わらハになして山へつかへ、うけたまはるとて三郎か、いたハしやあねこせんの、たけとひとしきくろかみを、てにくるくとひんまひて、もとゆひきりよりふつときり、

F

【与七郎本】そのぎならば、□とまこひのさかつきせんとたまへと、さけもさかなもあ□ばこそ、たにのしみづを、さけと御なづけ、かしわのはをさかつきにて、あねこの一つおまいりあつて、つしわうどのにをさしあつて、けふははたのまもりのぢぎうほさつとも、御身にまいらす、

【明暦本】其ぎにて有ならば、さかつきせんとて、たにのし水を、

さかつきにてお参あり、けふははたのまもりのぢぎうも、御みにまいらす、

【個人蔵本】いまさらは、いとまこひのさかつきせんと給ひ、かしハをたうさのさかつきとさため、ゆきをわりてさけとなづけ、おもふしさいのあるあいた、おとこのふてさし給へ、ともかくもとて、つしわう殿とりあけてさし給へは、あねこさかつきをしいた、きけるてもとさせ給ひつゝ、わらハあねなれとも、ありかひなし、おと、ハおとこなれとも、なんしなれハ、やかて家をおさむるやうに、そのさかつきをもおさめ、また、此ぢぎうほさつをも、御身はたにうけ給へ

G

【与七郎本】たんしようはかへつて、みれんのさうときひてあり、をちてゆきてのそのさきで、▼(本文なし) ざいしよかあるならば、まづてらをたつねてに、しゆつけをはたのまひよ、しゆつけはたのみかいがあるときく、

【明暦本】しせんおちて有ける共、▼(本文なし) まつ寺をたつねて、しゆつけをはたのまいよ、

【個人蔵本】たんきは、みれんのそうといふぞ、もし又ミちにてまよひたりとも、あるひはおつてのかゝるとも、たにそふてこ川にのぞめ、かならず大川にいつへきぞ、大河に出ハミなとかあるへし、さむらい身をふかくたのめよ、さいしよに出は、てらをたつねて、出家にあふてたのむへし、侍と出家とハたのミかいのあるとこそきけ

H

【与七郎本】ツメじやけんなる三郎が、うけたまはり候とて、十二こ

の、のばりはしにからみつめて、ゆぜめみづせめてとふ、それにもさらにをちされば、みつめきりをとりいだし、ひぎの□らを、かりりくともうでとふ、いまはおと、を、おといたと申そうか、申まいとはおもへども、物をはいわせ□□まはれの、コトハたゆふ此由おき、あつて、物をいわせうためこそある、物をいわばいわせいとお申ある、フシいま□もおとくか、山からもとりた物ならば、あねはおと、ゆへに、せめころされたとお申あつて、よきに御めをかけて、おつかいあつてたまはれの、大夫此由きくよりも、とふ事は申さいで、とはすかたりをする女めを、物もいわぬほどせめてとへ、三郎いかにとの御ちやう也、ツメしやけんなる三郎か、てんしやうよりも、からこのすみをとりにいだし、おふにはにすつばとうつし、太うちわをもつて、あふきたて、いたはしやひめきみの、たぶさをとつて、あなたへひいてはあつくばをちよ、おちよくとせめければ、せめてはつよし身はよわし、なにかはもつてたらうべきと、正月十六日ひごろ四つのおはりと申には、十六さいを、いちごとなされ、あねをはそこにせめころす

【明暦本】ツメじやけん成三郎が、水せめにしてとふ、今はおと、を、おといたと申そうか、申まいとは思へ共、物をはいわせて給れの、ことは太夫此由お聞有て、物をいわせうためこそ有、物をいわばいはせとお申有、フシ今にもおと、か山からもとりたら、あねはおと、ゆへに、せめころされたとお申有て、よきに御めをかけておつかい有て給れの、太夫此由聞よりも、とふ事は申さいで、とはずがたりをする女めを、物いわぬほどせめとの御でう也、ツメしやけん成三郎か、そこにせめころす

【個人蔵本】うけたまはるとてすいくわのせめをそあてにける、これにもさらにおちされハ、こぼくのうへにつりあぐる、あぐるときにはいきたゆる、おろせはすこしよミがへる、あらくるしや、いま

ははやおと、かゆくゑ申へし、物のふきいで、なハをしつめていたりしか、あんじゆこのよしきこしめし、いかにや大夫三郎殿、今にもおと、が山からかへりて候ハ、あねハおと、ゆへ、せめころされたとお申有て、御めをかけて給はれといふ、たゆふきいて、とはすかたりをするをんなめを、なをもせめてとへといふ、うけたまはると申て、あらけなふこそしたりける、いたハしや、あんじゆのひめ、おちはやなど、おもはれしか、おちてかいなの、わかいのち、しなはやおほしめし、おしまるへいはとしのほと、十六さいを、一ごとし、二月十六にちの、よつのをはりと申すに、したをふつとくひきり、つゐにむなしくなりたまふそ、あはれなりけるしいかな、

与七郎本と近い表現を有する箇所は、A、B、Dがあげられよう。例えばAは、さんせう太夫の酷使に耐えかねた安寿が、づし王に逃亡を持ちかける場面であるが、その際のづし王の返答が明暦本にないのに対し、与七郎本個人蔵本に「壁に耳、岩に物言う」と、共通する諺表現が用いられている。BとDも、A同様、明暦本にない本文を、与七郎本に見出すことができ、個人蔵本と与七郎本の近さを示す箇所となっている。

このようにみると、個人蔵本は明暦本と同じく、与七郎本から派生した抄出本のように思われる。しかし、個人蔵本には与七郎本、明暦本にはない、独自本文も確認することができる。ここでは内容に関わる箇所のみ、C、E、F、G、Hにあげ、独自本文の部分に点線……を付した。項目ごとに要点を確認してゆこう。

Cは額に焼金を当てられる場面である。与七郎本、明暦本では、づし王が安寿に当てられる様をみて恐怖に驚き、「ちりりちりりとをちらるゝ」とあるが、個人蔵本の点線部……では「此やきかねにもおそれたまはず」とあり、三郎に非難の言葉を差し向ける姿が描かれる。

Eは姉と弟とともに山へやってほしいと懇願する安寿の長い髪を三郎が切り「おうわらは」にして山へ追い立てる場面である。与七郎本、明暦本には、なぜ「おうわらは」にしたのが説明されていない。そこで個人蔵本の点線部……をみると、女に男の仕事をさせる外聞の悪さを隠すために、童の髪型にしたことがわかる。

Fは、姉弟が別れの水盃を酌み交わす場面である。与七郎本では、酒も肴もないために谷の清水を酒、柏の葉を盃と見立てる哀れな描写となっているが、明暦本は「谷の清水を、盃にてお参りあり」と、かなり省略され、場面本来の意味を失っている。一方で個人蔵本をみると、谷の清水ではなく、雪を割って酒とした、とある。注意すべきは、点線部に、水盃を交わす安寿がやがて家を治めることと掛けて、づし王の方から盃をおさめるよう促していることである。続く本文では、姉が母親からゆずりうけた地藏菩薩を弟に託し、づし王の出世を願う。願いの通り、物語の最後では地藏菩薩とともに家の証明である「玉造の系図の巻物」を帝の面前で読み上げ、大団円をむかえることになる。個人蔵本の盃の叙述は、この後の家の再興やづし王の出世へと展開してゆくための伏線として機能しているのではないか。物語を主人公の出世というテーマで一貫させることは、説経『さんせう太夫』を祝言性の強い作品に作り替えるために、必要だったのではないか^(E)。先ほど、個人蔵本の拷問場面の挿絵(9)を例にあげ、説経や古浄瑠璃の絵巻、絵入り写本を制作するにあたり、作品本来のあり方を変化させることがあるのではないかと推測した。この盃の文脈がもし個人蔵本に特有の表現であれば、本文にも、そのような改編の意識が働いていた例となろう。

ところで、この場面の挿絵をみると、与七郎本、明暦本ともに柏の葉の盃を押し出す安寿と、それを受けるづし王の姿が描かれている(図2・3)。これが、前述した横山本と個人蔵本が別本であることの根拠となる挿絵である。

〔図2〕
与七郎本、挿絵(『説経正本集』一より転載)



〔図3〕
明暦本、挿絵(『説経正本集』一より転載)



明暦本には、柏の葉を盃にした本文が省略されているため、与七郎本の本文を読んではじめて、このしぐさの意味を理解することになる。個人蔵本には、この場面の挿絵はない。すなわち、与七郎本、明暦本、個人蔵本の本文と絵の関係を整理すると、以下のようにになる。

【与七郎本】(本文) 谷の清水の酒を、柏の葉を盃で組み交わす

(挿絵) 柏の葉の盃

【明暦本】(本文) 谷の清水を、盃で組み交わす

(挿絵) 柏の葉の盃

(≪横山本)

【個人蔵本】(本文) 雪を割った酒を、柏の葉を盃で組み交わす

(挿絵) ×

ここで先の横山本と個人蔵本の違いについても一度確認しておく。横山重氏によれば、横山本は明暦本と、本文、挿絵が同系統であったという。もし個人蔵本がこの横山本と同一であるならば、本文、挿絵が明暦本と同じ関係になるはずである。しかし、個人蔵本には水盃の絵がないばかりか、本文にも異なる。したがって、挿絵だけではなく本文からも横山本と個人蔵本は全くの別本であると判断できるのである。

続いて、Gは一人落ち延びるづし王に、安寿がこれからなすべきことを言いつけ、送り出す場面である。その言いつけは与七郎本、明暦本では、短気の禁止と出家を頼むことであったが、個人蔵本には小河をたどって大河に、やがて都にたどりつくように言い渡す本文がみえる。

Hは、弟を逃がした安寿が拷問によって絶命する代表的な場面である。諸本中、内容を完備するものは与七郎本で、(図2)の下段の絵にもあるように、のぼり梯子に絡みつけての湯責め水責め、三ツ目錐の責め、火あぶりの拷問が並べ立てられる。明暦本はこれらをほとんど省略し、

湯責め水責めにのみ言及する。個人蔵本はこれらと異なり、古木に縄でつり上げて上下にゆさぶる拷問である。同じ趣向は、舞曲『信田』や古浄瑠璃『義氏』にみえる。『義氏』(慶安四(一六五二)年写)の本文をみてみたい。

(千太夫は)七度八度のとひしやうをかけ、責おとさせたまへや、国司様とそ申ける、国司此由聞召、(中略)彼女を引伏、千筋の縄を懸、のほり橋にく、り付、先一番のとひしやうには、水攻にしてそとわれけり、(中略)第二番のとひしやうには、へひじ六具、樽六荷に湯をつひて、湯責にしてそとわれける(中略)第三番のとひしやうには、やがらをもつて、四十四の骨のつかひを、きりくともまれたり(中略)第四番のとひちやうには、松の木板に、八寸釘をあき間もなきほど打ぬきて、其上をわたれくと有ければ(中略)又此度のとひしやうには、廣庭に、からこのすみを取り出だし、大團にてあをき立、四の手足を引はりて、鳥あふりにそ責めにける(中略)又此度のとひしやうには、千筋むすちの縄を懸、枯れ木のの上につり上る、あくる時には、いきたゆる、おろせはすこしよみかゑる、

『古浄瑠璃正本集』(二)

一番から八番までの最後に、枯木の拷問がみえる。このような拷問を列挙する語りは「七十余度の拷問」「七十五度の問状」と称され、語りの定型表現として知られている⁽¹³⁾。右の『信田』『義氏』の他、『牛王の姫』『よろひがへ(万寿のまへ)』『てごくま物語』などにも拷問を列挙する語りがあるが、それらの拷問は一つ一つが独立し、別の作品でも同じ種の拷問が用いられている。したがって、同一作品内で順序の入れ替えや、拷問の数の増減、その種類の変換が起こりやすい箇所となつ

ている。一例として説経『小栗判官』の、うつほ舟で六浦に漂着した照手が、邪険な姥にいくつもの拷問をうける場面がある。諸本では松葉で燻したり、叩いたりするが、唯一、横型絵入り写本『おくり』三冊（天理大学附属図書館）にのみ、釘で刺すという拷問がみられる⁽¹⁴⁾。Hの個人蔵本の独自本文も、拷問語りの入れ替えや変換といった特性により、全く異なる手法に置き換わったと考えられる。

以上、中巻における諸本の異同を列挙してきたが、これらを一度、諸本間における個人蔵本の位置づけと照らし合わせ、整理してみよう。まず、上巻で明暦本と同系統であった個人蔵本は、中巻に入ると、A、B、Dのように与七郎本と共有する本文を持ち始める。しかし、個人蔵本独自の本文も確認できる。その箇所をC、E、F、G、Hにあげた。これらは従来のテキストになく、物語の別の見方を提示する非常に貴重な本文である。同時に、諸本の捉え方にも課題を投げかけている。先ほど初期の重要な伝本としてあげた明暦本、草子本、横山本は、いずれも与七郎本の影響下に成ったものであった。だが、個人蔵本の出現により、従来とは異なる本文があったこと、またそれらが、同時代の別の語り物とつながりを持つていることなどが、明らかにになった⁽¹⁵⁾。ここでは中巻のみを対象としたが、下巻の天王寺の場面にもまた、個人蔵本独自の表現が確認できる。次節では、この点について詳しくみてゆくこととする。

四、北野天満宮との関わり

中巻で複雑な様相をみせた個人蔵本は、下巻に入ると、再び明暦本文に沿うように展開してゆく。だが、天王寺の場面に入ると、個人蔵本は与七郎本、明暦本と全く異なる本文を展開する。

まず、この場面の梗概を確認しておこう。さんせう太夫の元から逃げたづし王は、国分寺の聖に背負われて都七条朱雀権現堂にやって来る。すると、足腰が立たなくなっている。土車に乗せられて子ども等に天王

寺まで運ばれ、袖乞いをして暮らす。天王寺の石の鳥居にとりつくると足腰が立ったので、やがて天王寺の「おしやり大師」のもとで奉公していた。一方で都の梅津の院は、子を求めて清水寺に申し子祈願をする。夢告の通りに天王寺へ向かうと、「おしやり大師」に仕えるづし王に目がとまり、養子にする。

天王寺は、づし王の復活と、その後の出世につながる重要な場で、与七郎本、明暦本の挿絵にも、「天王寺」と額をうった鳥居と、づし王と「おしやり大師」の対面が描かれている。先行研究において、この天王寺をめぐる話が物語の形成に重要な意味をもつことがたびたび指摘されてきた。

づし王を乗せた土車の道程と、梅津の院の足取りを確認すると、づし王が都の七条朱雀権現堂から天王寺にいたり、梅津の院に見いだされるまでに、五つの地名を数えることが出来る。いま、それらを登場順に、(a)～(e)で明記した。また、(a)～(e)の地名を比較できるように、(図4)で表にした。

【与七郎本】あらいたはしやつしわう殿は、(a)しゆしやかごんげたうに御ざあるが、しゆしやか七むらのわらんべともはあつまりて、

〔図4〕

づし王と梅津院の経路	与七郎本	明暦本	個人蔵本
(a) づし王 到着地1	朱雀権現堂	朱雀	朱雀
(b) づし王 到着地2	都の城(平安城)	都	北野
(c) づし王 到着地3	天王寺	天王寺	×
(d) 梅津院 申し子祈願	清水寺	清水寺	北野
(e) 梅津院とづし王の対面	天王寺	天王寺	×

いさやはごくみ申さんと、一日二日ははごくむか、かさねてはごくむ物もなければ、いさやつちくるまをつくつて、みやこのしやうへ、ひいてとらせんとて、(b) みやこのじやうへぞひいたりける、都はひろいと申せ共、五日十日ははごくむか、かさねてはごくむ物もなし、いさやこれより、なんほく天わうしへ、ひいてとらせんとて、しゆくをくりむらおくりして、(c) なんほく天わうしへぞひいたりけり、あらいたはしやつしわう殿は、いしのとり井にとりついて、ゑいやつといふておたちあれは、御だいじの御はからいやら、又つしわう殿の御くわほうやら、こしがた、せたまひける、(▼中略：おしやり大師にのものとで奉公する) 花のみやこにおはします、三十六人のしんか大しんの御なかに、むめずのゐんと申は、なんしにもよしにも、すゑのよつきが御さなふて、(d) きよ水のくわんをんへまいり、申こめさるゝが、きよ水のくわんをんは、ないしんよりもゆるきいてさせ給ひて、まくらかみにそたち給ふ、むめずのゐんのやうしは、これよりも (e) なんほく天わうしへ、おまいりあれとの佛ちよく也、あらありかたの御事やと、むめすの御しよに、御けかうありて、御よろこびはかきりなし

【明暦本】 あらいたはしやつし王殿、(a) しゆしやかに御ざ有か、しゆしやかのわらんべ共はあつまり、いさやはごくみ申さんと、一日二日ははごくむか、かさねてはごくむ物もなければ、いさや車をつくり、(b) 都へ引とらせんとて引たり、都ひろいと申せ共、はごくむ物もなし、それより (c) 天わうしへそ引たりけるか、太子の御はからいやら、こした、せ給ひける、(▼中略：おしやり大師にのものとで奉公する) 花の都におはします、卅六人のしんか大しんの御中に、むめずのいんと申は、なんしにもよしにも、すゑのよつきが御さなふて、(d) きよ水のくわんをんへ、申こを召るゝか、

くわんをんは、内ぢんよりも出させ給ひて、まくらかみに立給ふ、御みのやうしは、是よりも、(e) なんほく天王寺へ、おまいりあれとの佛ちよく也、あら有かたの御事やと、天王寺参と聞へける、

【個人蔵本】 あらいたはしや、つしわう殿、いのちのおやのひしり、たんこのくにへかへり給ふ、ちからなくして、(a) しゆしやかにおはしけるか、わらんへともあつまりて、いさやはごくみ申さんとて、一日二日ハはごくみ給へとも、かさねてはごくむ物もなければ、さと人かくるまをつくり、みやこへ引て、とらせんとて、(b) ミヤこきたのへ引つけける、さてつしわう殿、そこにてまいり、けこののはなからこふて、露のいのちをつらねてぞ、おハしける、ここにまた、ミヤこに三十六人の、しんか大しんの御中、むめすのゐんと申ハ、なんしにてもよしにても、すゑのよつきのあらされハ、(d) 北のへしやさんなされつゝ、申こをそなされける、まんずるよの御つけに、(e) これよりけこう申なは、つちくるまにのりたる、せうしん一にんあるへきそ、それこそなんぢがよつきよ、とあらたなる御じげんやとかうむりて、有かたきしたいとて、(e) あたりを御らんすれハ、つちくるまにのりたる、こつじき一人あり

まずづし王の道程である (a) (c) の列をみると、与七郎本、明暦本は、ともに朱雀権現堂から天王寺へむかう。また、申し子祈願をする場所は与七郎本、明暦本ともに清水寺である。これに対して個人蔵本は、与七郎本、明暦本と同じく、朱雀を出発するものの、その後は北野へと流れ着き、土車にのる事になっている。

次に、梅津院の (d) (e) の梅津の院の申し子祈願の地について、与七郎本、明暦本は、清水寺で夢告を受けて天王寺へ向かうことになっているのに対し、個人蔵本は、またも北野で夢告をうけている。個人蔵

本の、天王寺に代わるお告げの場所は「(e)これよりけこう申なは」(e)あたりを御らんすれハ」のような形で示され、特定の地名は書かれていない。つまり個人蔵本は、与七郎本、明暦本の天王寺にかわって、北野(北野社)を、この場面の中心に据えようとしているのである。天王寺が北野社になることで、当然のことながら鳥居をめぐる奇瑞や「おしやり大師」との邂逅(中略した「▼おしやり大師への奉公」の箇所)は個人蔵本で語られてはいない。

いうまでも無く、北野社頭は中世末期から近世期を通じて芸能者の一大興行地であった。特に、参詣者の行きかう経王堂の傍近くは、芸能興行の禁制札が掲げられるほど、芸能者のメッカであったとされる。近世における北野社の通史的な研究としては、宗政五十緒氏による北野社門跡の目代宛ての記録資料をめぐる報告が著名である⁽¹⁶⁾。特に近世初期については興行関連の記事を抽出し、歌舞伎上演と上七軒などの公的な遊楽地との関連を論じている。また、徳田和夫氏はやや遡った室町末期の北野社およびその周辺に的を絞り、近世にいたる芸能の動態、特に清水寺鉢叩きや説経説きについて、画証とともに報告している⁽¹⁷⁾。

さらに徳田氏は、『北野社家日記』慶長四(一五九九)年正月二十四日条「甚四郎をせつきやうとき頼、明日経王堂のわき二てとき度由申、甚四郎当坊へ被申候間、諸くわんちん禁制と御札うち申候間、中々同心不申候也、」の記事をあげ、北野社経王堂周辺の説経説きの存在を指摘した。これは説経説きが文献に現れる最も早い記事である。周辺の清水寺や四条河原などの芸能興行地よりも、ここ、北野に説経説きの初出が確認できる点が重要であろう。このような北野周辺の状況は、物語にも反映されている。天理大学附属天理図書館蔵「おくり」絵入り写本三冊は、古い説経の本文をとどめたテキストとされている⁽¹⁸⁾。その末尾に、

いまにいたるまで、ためしすくなき事なりとて、をくり殿を、あい

せんみやうわうとおいはひある、てるてのひめをは、むすふのかみ
とおいはひあつて、みやこのきたのにみたうをたて給ふて、いまの
世にいたるまで、すゑはんしやうと、いつきかしつき、おかみ申は
かりなり

とみえ、小栗判官を愛染堂(法華堂の通称)に、照天姫を結神として祀り、北野に御堂を建てたと本地を結ぶのである。諸本の本地は、御物絵巻の本地に「美濃国安八郡墨俣正八幡」、正徳年間の豊孝正本に「常陸国鳥羽田」とあり、一定していない。このような様々な本地結びの意味について、徳田氏は次のように述べる⁽¹⁹⁾。

この三種の本地の差異は、「聴く人の興味に適應」した結果からばかりではなく、むしろ、説経説きの意識的な語りの技術からであったように思う。即ち、語る際の時空間の状況と関係し、社寺の場所や縁日等で、説経説きが巧みに少しずつ改編し、聴聞の人々に一層の現実感を持たせたのではないだろうか。奈良絵本が唯一、御物絵巻本の本地趣向を受けつぎながらも、最終的には唐突にも北野の愛染堂の本地を語るようになった背景には、そうした作用があったはずである。

『おくり』絵入り写本三冊の例を個人蔵本にあてはめるならば、天王寺を北野にかえる意味もまた、理解できよう。おそらく個人蔵本も、北野社をめぐる芸能興行の隆盛を背景にして、天王寺ではなく「北野」をここに登場させたと考えられるのである。

続いて徳田氏は、初期説経の本文に散見される「これは——の御ものかたり、さておき申」という語りはじめと語り収めに注目し、説経の語りの手法は段落が連続的に語られ、一つの物語を形成することだとし

た。このように、説経の物語の一部が単独で語られる事例は、『かるかや』の「高野巻」をめぐって明らかにされている。はめ込まれたかのごとき入れ子型の「高野巻」が、『弘法大師空海根本縁起』という独立したテキストとして流布していたのである⁽²⁰⁾。

この現象をふまえて、与七郎本、明暦本にある天王寺の奇瑞譚が個人蔵本にない理由を考えるに、天王寺の部分、入れ子型の物語であったとは想定できないだろうか。この点に関しては阪口弘之氏より、「おしやり大師」の奉公の場面をめぐって重要な提言がなされている。与七郎本の本文をあげておこう。

▼おしやり大師への奉公

都はひろいと申せ共、五日十日ははごくむか、かさねてはごくむ物もなし、いさやこれより、なんほく天わうしへ、ひいてとらせんとて、しゆくをくりむらおくりして、なんほく天わうしへぞひいたりけり、あらいたはしやつしわう殿は、いしのと井にとりついて、ゑいやつといふておたちあれば、御だいじ(ごだいじ)の御はからいやら、又つしわう殿の御くわはうやら、こしがた、せたまひける、

折ふし、御だいし(ごだいし)のもりをなさる、おしやり大しのおとをりあるが、つしわう殿を御らんじて、これなるわかさふらひは、とんせいのそみか、又ほうここのそみかとおとひある、つしわう殿はきこしめし、ほうかうのそみとお申ある、おしやりたいしは、きこしめし、それかしが内には、百人のちこわかしゆうをおき申、そのふるはかまをめされて、おちやのきうし成共めされうかとの御ちやう也、なかくとお申ある、おしやり太しに御共ありて、ちこたちの、ふるはかまをめされて、あなたへはこゑなまりのさだう、こなたへはこゑなまりのさだうと、よきにちやうあいせられてはします、これはつしわう殿の物かたり、さてをき申

阪口氏は、波線部「御だいし」は天王寺境内にある聖徳太子を祀る太子殿のこと、傍線部「おしやり大し」は、阿闍梨大師の転訛ではなく「御舍利大師」ではないかと述べた⁽²¹⁾。この「おしやり大師」は草子本以降、「阿闍梨」と解釈されてゆくが、それ以前の与七郎本、明暦本ではすべて「おしやり」となっており、明らかに別の意味で用いられている語である。なぜ石の鳥居の場面が都から一度離れて、わざわざ天王寺を舞台にするのかも、別の物語が挿入されていると考えれば納得できるのではないか。それを物語るかのごとく、本場面の終わり傍線部には、徳田氏が指摘した語りの一単位を示す「これは——の御ものかたり、さておき申」という語り収めの文句が見える。

阪口氏は石の鳥居が、永仁二(一二九四)年に非人救済で知られる忍性によって造立されたこと、忍性の師、叡尊が舍利出湧の靈験譚で著名なことにふれ、律宗僧が、これらの天王寺の奇瑞の語りの成立に関与していたとする。たしかに、叡尊の自伝『感身学生記』建長三(一二五一)年正月五日条には、叡尊が法談の最中に舍利を湧出させたという記事が載る。叡尊の舍利信仰は先行研究では周知のことであり、このほかにも多くの舍利湧出の記事が確認される⁽²²⁾。

この点については、叡尊、忍性の周辺に、天王寺の奇瑞を語るテキストが存在したのか、あるいは、叡尊を「おしやり大師」と称する文化環境があったのか等、検討を要する。だが、『小栗判官』の「藤沢上人」や、『かるかや』の「法然上人」などのように、説経には主人公を援助する高僧たちの活躍がまみられる。天王寺の場面もまた、同じような視点でとらえることも可能なのではないだろうか。今後の検討課題としていきたい。

おわりに

以上、個人蔵『しゆつせ物語』の特徴とその意義について述べてきた。

要点をふりかえると、個人蔵『しゆつせ物語』は、初期説経正本と同じ、三冊本という形態的特徴を備えている。また、本文は全体を通じて明暦本の本文と同じであるが、中巻、下巻の一部にそれぞれ独自本文をもつ。従来知られていた諸本がすべて説経与七郎の影響下であることを鑑みれば、個人蔵本は別系統のテキストとして貴重であろう。今回は十分検討できなかったが、挿絵もまた、安寿の拷問の場面をふくめて独自の表現を備えている。

それだけでなく、ささら乞食と呼ばれ、賤視された芸能である説経が、豪華な絵入り写本として享受されていたことも重要な問題を投げかけている。周知の通り、舞曲を題材とした絵巻、絵入り写本の多くは、寛永版舞の本を粉本にして制作されていた⁽²³⁾。しかし個人蔵本は、『さんせう大夫』を「しゆつせ物語」と題し、祝言の要素を加えた、やや主題の異なる物語につくりかえている。さらにいえば、明暦本にある古説経独特の語法は、個人蔵本で別の語に言い換えられている⁽²⁴⁾。つまり、すでに手元にある版本を踏襲するのではなく、作品を独自の方法で絵巻や絵入り写本に仕立てており、版本を粉本にして、大量生産する方法とは異なっている。それを裏付けるかのように、説経、古浄瑠璃を題材とした絵入り写本や絵巻は作例も少なく、かつ、特注であったのか、豪華で大部なものばかりである。同様の事例としては、豪華で詞章も古態をとどめている岩佐又兵衛古浄瑠璃絵巻群が想起される。誤解を恐れずに言えば、説経、古浄瑠璃のテキストは、正本が上梓され、詞章が固定される以前に、絵巻や絵入り写本のかたちで享受されていたのではないだろうか。

説経、古浄瑠璃を題材とした絵巻、絵入り写本の研究は、隣接する芸能にくらべ、いまだ全体像の把握が十分にされていない。口頭で語られ、上演された語り物のテキストは、なぜ文字化され、読み物にされる必要があったのか。また、それらは刊行される正本と比べて、どのよう

な時期、方法で制作されるのか。人々がどのように作品に親しんでいたのか、享受の問題も含めて今後もさらに追求してゆきたいと考えている。

注

- (1) 横山重・信多純一編著『じやうりり 十六段本』(大学堂書店、一九八二年)、信多純一『浄瑠璃御前物語の研究』(岩波書店、二〇〇八年)、信多純一『むらまつ 諸本成立考』(『語文』三八輯、一九八一年四月)、林久美子「語り物から操り浄瑠璃へ―例えば「村松」の場合」(『近世前期浄瑠璃の基礎的研究』和泉書院、一九九五年)、秋本鈴史「たむら」解題(信多純一編『赤木文庫古浄瑠璃稀本集―影印と解題―』一九九五年)、岸本優子「阿弥陀の本地」小考―物語草子と説経・古浄瑠璃―(『文学史研究』二十三号、一九八二年十二月)など。

- (2) ジャンルごとに、最新の論考をあげておく。
・能

小林健二「能の絵画的展開―二つの新出資料をめぐって―」(中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』竹林舎、二〇一二年)、「屏風絵に描かれた能―香川県立ミュージアム「源平合戦図屏風」をめぐって」(『能と狂言』十一号、二〇一三年五月)など。

・狂言

藤岡道子「狂言の絵画資料の収集―その5―狂言古図の有力な一群について―」(『東洋哲学研究所紀要』二十八、二〇一二年)、「狂言古図の曲名不明曲の考察」(『京都聖母女学院短期大学研究紀要』四二、二〇一三年三月)、「絵画資料にみる江戸初期の狂言」(『能と狂言』十一号、二〇一三年五月)など。

・幸若舞曲

小林健二「幸若舞曲―絵画的展開」(『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲』三弥井書店、二〇〇二年)。

泉万里「幸若舞曲「八島」とその絵画」(『大和文華』第一一三号、二〇〇五年八月)、「大織冠図屏風の変容」(中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』竹林舎、二〇一二年)。

- (3) 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『慶應義塾大学附属研究所 斯

道文庫収蔵マイクロフィルム等目録初輯』（慶応義塾大学附属研究
所道文庫、一九八七年）一七四頁。

- (4) 荒木繁「説経の盛衰」（岩波講座 歌舞伎・文楽『浄瑠璃の誕生と
古浄瑠璃』第七巻、一九九八年）、信多純一「解説」（『新日本古典文
学大系』古浄瑠璃 説経集』岩波書店、一九九九年）。

- (5) 諸本については、以下の論考を参照した。

佐野みどり「浄瑠璃さんせう大夫物の系譜」（『伝承文学研究』第
二八号、一九八三年一月）、中田久美子・信多純一「森鷗外『山椒
大夫』依拠本翻刻と解説」（『神女大國文』第二二号、二〇〇一年三月）、
阪口弘之「さんせう大夫」の解説（『新日本古典文学大系』古浄瑠璃
説経集』岩波書店、一九九九年）。

- (6) 前掲注4、荒木繁論。

- (7) 林真人「明暦二年刊『せつきやうさんせう大夫』の特徴―詞章省略
の方法―」（『伝承文学研究』六十号、二〇一一年八月）。

- (8) 岩崎雅彦「『安宅』と浄瑠璃『凱旋八島』『出世景清』」（『能楽演出
の歴史的研究』三弥井書店、二〇〇九年）。

- (9) 鳥居フミ子「『正氏出世始』とその特色」（『東京女子大学日本文学』
第七九号、一九九三年三月）

- (10) 与七郎本、明暦本、個人蔵本、の三冊の巻分けは、中巻と下巻の間
は三本とも同じであるが、上巻と中巻の巻分けはやや異なる。個人
蔵本のみ、初めて姉弟が逃亡を考える場面で上巻がおわり、三郎が
立ち聞きする箇所から中巻がはじまる。与七郎本と明暦本にくらべ
て個人蔵本は、やや前の箇所の中巻にはいるため、Aの個人蔵本の
本文は上巻に含まれている部分である。

- (11) 与七郎本、明暦本の引用本文はすべて『説経正本集』一によった。
個人蔵本には私に読点を施した。

- (12) 同じように、家の再興をテーマにした舞曲『信田』にも、「玉造の
系図の巻物」が登場する。『信田』に限らず古浄瑠璃において、系
図の伝来をモチーフにしたお家騒動物は数多く作られている。『さ
んせう大夫』もまた、このような同時代の家の再興を出世の話とし
てめる文化状況があったのではないだろうか。なお、『信田』の
系図をめぐる問題については、次の論考がある。荒木繁「幸若舞曲『信
田』論」（『語り物と近世の劇文学』桜楓社、一九九三年）、劉慶「御

家騒動物としての『信田』」（『文学史研究』四十一号、二〇〇〇年
十二月）。

- (13) 服部幸造「幸若舞曲のことば（一）―徒然さのあまりに―」（『語り
物文学叢説―聞く語り・読む語り』三弥井書店、二〇〇一年）。

- (14) 「姥はまたたくみける」「それ夫と申すは、泣き顔に飽くととき。泣
かせん」と思ひ、くろがねの針をこしらへて、照手の姫の腰のあた
りを、ひたさしにこそ刺されける。いたはしやな照手の姫は、ここ
やかしこを刺されて、涙の淵にぞお沈みある」（『説経正本集』二、
本文には私意により漢字をあてた）。

- (15) ただし個人蔵本は、諸本の中で孤立したものではない。独自本文の
うちE・Fは、正徳三（一七一三）年刊行の佐渡七太夫豊孝正本に、
E「わつは一人つかいかね。女を山へのほすと。せけんのとなへも、
いか、也」、F「さけもさかつきもあらはこそ。雪水を酒となつて」と、
類似表現が確認できるためである。佐渡七太夫豊孝正本と前の時代
のテキストとの関係について、ここでは詳しく言及できないが、個
人蔵本が佐渡七太夫豊孝正本に先立つテキストであろう。

- (16) 宗政五十緒「明暦京都歌舞伎」（『国語と国文学』第五十一巻第十号
一九七四年十月）、「近世後期の北野天満宮境内における芸能とその
興行」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』十四号、一九七五年十月）、「江
戸時代中期の北野天満宮目代日記に見えたる芸能興行史料」（『芸能
史研究』五十八号、一九七七年七月）、「享保十四年の北野天満宮境
内における芸能興行」（『龍谷大学論集』四一五号、一九七九年十月）。
徳田和夫「北野社頭の芸能―中世後期・近世初期」（『芸能文化史』
四号、一九八一年十二月）、「説経説きと初期説経節の構造」（『国文
学研究資料館紀要』二号、一九七六年三月）、「室町期の参詣風景―
特に北野社をめぐる」（『報告資料稿』）（『巡礼記研究』四号、
二〇〇七年九月）。

- (17) 『説経正本集』二の本書解題に、「この奈良絵本には、低級な口語や
諺語などが多くつかつてあり、その言葉のいひまはしや、又は、比
喩のあげやうなどは、むしろ、古い説経に近いといへる。（中略）又、
舊版校了の直後に見ることのできた、古活字版丹緑本の「をくり」
の零本や、戦後になつて拝見した、御物絵巻の「をくり」とも、連
関するところが多い。」とある。

- (19) 徳田和夫「説経説きと初期説教経節の構造」(『国文学研究資料館紀要』二号、一九七六年三月)。
- (20) 阪口弘之「高野の伝承二題―「弘法大師御伝記」「鶯の弥陀の事」―」(『人文研究』第四四卷第一三分冊、一九九二年十二月)、小林健二「語り物の展開(2)―説経「苺萱」と「高野の巻」―」(『講座日本の伝承文学』第三卷、三弥井書店、一九九五年)、武田和昭「弘法大師空海根本縁起」について(『四国八十八ヶ所辺(遍)路の成立をめぐる』)、『調査研究報告(香川県立歴史博物館)』第三号、二〇〇七年五月)。
- (21) 新日本古典文学大系脚注、および、『しんとく丸』の成立基盤」(『説話論集』十五、二〇〇六年)。
- (22) 中尾堯「叡尊にみる生身仏の信仰」(『中世の勸進聖と舍利信仰』吉川弘文館、二〇〇一年)。
- (23) 前掲注2、小林健二論。
- (24) 伊東龍平「さきをいつくとおといある―説経正本における常套句について―」(『国語国文』一九六九年七月)によれば、古来の日本の文芸が用いてきた「給ふ」は、初期説経において「お―ある」という独特の敬語法で現れる。明暦本と個人蔵本とが重なっている範囲(上巻と、天王寺の場面を除いた下巻)に限定して、明暦本にみえる「お―ある」が個人蔵本ではどの程度他の表現に言い換えられているかを確認したところ、明暦本の六十三箇所にあった「お―ある」のうち、四十一箇所が、個人蔵本では「給ふ」や、他の表現になっていた。この統計は一つの目安でしかないが、絵入り写本である個人蔵本が説経独特の敬語表現を好まず、本来の敬語に改めたのではないかと推察される。

【付記】貴重な資料の閲覧に際し、お世話になりました慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に深謝いたします。

One Aspect of the Production of Picture Scrolls and Picture Books Based on *Sekkyō* and Early *Jōruri* Puppet Plays: Concerning a Copy of *Shusse monogatari* (*Sanshō Dayū*) in a Private Collection

KUME Shiori

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese Literature

Sekkyō and early *jōruri* are types of oral storytelling that flourished at the end of the middle ages and the beginning of the early modern period in Japan, before the time of Chikamatsu Monzaemon. Textual research on *sekkyō* and early *jōruri* has focused on half-ream-size (*hanshibon*) early moveable-type editions (*kokatsujiban*), that is, on printed chapbooks. However, *sekkyō* and early *jōruri* libretti also survive in the form of hand-written picture scrolls and picture books with many illustrations. I believe these represent a valuable body of material on par with printed chanter's proofs (*shōhon*) which hold many possibilities such as the reconstruction of chanter's proofs that are no longer extant. Nevertheless, intensive research on these manuscript sources lags far behind that on contemporary performing arts like the *noh* and *kyōgen* theatres and *kōwaka* ballads. In this paper I discuss the particularities of a copy of *Shusse monogatari* in a private collection, as an example of the importance of picture books and scrolls of *sekkyō* and early *jōruri*.

Key words: *sekkyō*, early *jōruri*, picture scrolls, picture books, Nara picture books, *Sanshō Dayū*